

シルクロードの十字路（59・10・27）

—サマルカンド・ブハラ—

護

雅夫（昭16文甲）

只今ご紹介を戴きました護でございます。日比野大先輩から何か話をせよという御命令がございましたが、咄嗟のことで、急には思いつきませんで、丁度、今年（昭和五九年）の六月に、西トルキスタン（ソ連領トルキスタン）へ旅行しましたので、そのサマルカンド、ブハラの話でもさせて戴こうと思ひまして、標題は、「シルクロードの十字路」ということに致しました。「十字路」でして、「十字架」ではございません。最初の御案内では、「シルクロードの十字架」となっていましたので、それを御覧になった方から、「シルクロードとキリストの話でもするの
か」などという問い合わせもございましたが、「十字架」の話をするわけではありません。

私は、ときどき、NHKの高校講座で話をさせられています。そのディレクターから、「固有名詞は出来るだけ使わないでくれ、その代りにABC……を使ってはいけなやか」と言われたことがあります。しかし、いくら何でもAという国にBという皇帝がいて、Cという人物をDと

いう国へ派遣した……では解りません。歴史の話をするには、どうしても固有名詞は抜きに出来ませんが、本日は、あまり馴染みのない固有名詞は使わないことに致したいと思います。スライドを少しばかり持って来ておりますので、あとで、サマルカンド、ブハラ辺りの建物そのほかを御覧になっていただこうと考えています。

さて、アジア大陸の概念図をこのように描いてみますと、ここが湿潤地帯で、日本、中国本土、インド、東南アジアなどがこれに属します。ここが亜湿潤地帯のシベリア、ここがアジア大陸の中央部に横たわる大乾燥地帯です。

これが天山山脈、こちらの方がアルタイ山脈です。このアルタイ山脈より東方がモンゴル高原、そして、西方が、いわゆる中央アジアです。

ところで、中央アジアの、先に示しました天山山脈の北方には草原がひろがり、また、同山脈の南方は砂漠になっていますが、この草原と砂漠とはオアシスが点在しております。一般に、草原中のオアシスを結ぶルートは「草原ルート」、そして、砂漠中のオアシスをつなぐルートは、「オアシス・ルート」と呼ばれています。シルクロードと言いますと、普通には、「オアシス・ルート」だけが考えられがちですが、「草原ルート」も、また、「海上ルート」も、シルクロードであったのです。陸上にだけ限って申しますと、「オアシス・ルート」と「草原ルート」、——この二つともシルクロードであったわけです。

日本には、厳密な意味での草原や砂漠、したがって、それらの中に点々と散らばるオアシスはありません。ですから、そのオアシスをつらねて東西の両文明世界を結ぶシルクロード、また、その上を行きかう隊商の姿は、日本人にとっては、これを想像するより仕方がありませんでした。「月の砂漠をはるばると、旅の駱駝がゆきました」で始まる童謡「月の砂漠」は、作詞者加藤まさを氏が、何処かの海岸砂丘を前にした時、その頭に浮かんだ美しい空想の産物であります。また、我々は「通える夢は崑崙の高嶺のこなたゴビの原」と歌い、一高の寮歌には「胡砂吹く風」という句が見えますが、これらは、明治・大正期の多感な青年たちの、遙かなるいまだ見ぬ土地に対する憧れの表現にすぎません。想像や空想や憧れは、現実を美化いたします。それは限りなくふくれあがってゆき、心の奥底にひそむ「夢」が、まぎれもない「現実」のものとされます。このようにして、オアシスの人々が営む日々の暮らし、シルクロード、そこでの旅などが、如何にもロマンティックなものとして思いえがかれるようになるのです。

日本人のこのようなシルクロード観をさらに一層あおりたてたのが、NHKの特集番組「シルクロード」です。砂漠の彼方へ赤々と沈んでゆく太陽をバックにして駱駝のむれを曳く隊商が歩み、喜多郎の音楽が流れ、そこへ、石坂浩二の「シルクロードは……」というナレーションが入ると、シルクロードは、ますますロマンティックなものとなって、我々にせまってきました。

しかし、いま詳しく申し上げる時間はありませんが、オアシスの人々の生活は、水を求め、襲

い來たる砂・石・強風との戦いの連続でありましたし、オアシスとオアシスとの間には荒れ果てた砂漠や人の住まぬ草原が横たわり、切り取り強盗の出没も覚悟しなければなりません。このよ
うなオアシスでの暮らしやシルクロードの旅が、ロマンティックなものであつたはずはけつして
ないのです。NHKのなかに「シルクロード委員会」があり、私もそのメンバーの一人でしたが、
そこで、取材班の人から聞いたところでは、西ドイツのTV局員がNHKの「シルクロード」番
組を見て、「これは余りにも日本人向けに編集してある」と言つたということです。

これに関連して、一言申し上げておきたいのは、NHKの「シルクロード」番組には、いわゆ
る「やらせ」が少なくないことです。例えば、草原の遙か彼方から豆粒のような騎馬の人物が此
方に向かつてやってくる。それはしだいに大きくなり、ようやく、それが鷹匠であることがわか
る。そこで、取材班と会つて、いろいろ話をする。——こういう場面が先日放映されました。こ
れを見た人が、鷹匠に会つたのはまったくの偶然であるかのように考へるのは当然です。しかし、
真相はそうではない。その鷹匠は、はじめてTVに出るものですから張りきつて、一帳羅の背広
を着て來た。「それでは草原の感じが出ないので困る」と説得のすえ、ようやく普段着に着かえ
てもらい、向うの方からやつて來て、偶然会つたかのように演出したというのです。これは實際
に取材した人から聞いたことです。五十分ばかりの間に、一つのテーマにまとめて放映せねばな
らないのですから、或る程度演出するのはやむをえないことでしょうが、それがあまりひどくな

り、しかも、「日本人向け」に行われると、日本人のシルクロード観をさらに誤らせる結果になりはしないかと懸念されます。

話がそれましたが、シルクロードぞいの地域での生活やそこでの旅行が、きわめてきびしいもので、ロマンにみちた夢多きものではけっしてないことは、いくら強調しても強調しすぎることはないと思います。

そこで、「シルクロードの十字路」、つまり、シルクロードが交わる地点についてですが、そうした所は、幾つかあります。

中国の新疆ウイグル自治区で申しますと、例えば、この吐魯番盆地トルファンもその一つです。ここは、漢代から高昌壁こうしょうきなどと呼ばれ、南北朝時代から隋唐時代にかけて、ここに高昌国こうしょうこくがさかえましたが、唐の太宗に滅ぼされました。私は、一九七八年八月の初旬、日本考古学者訪中団の一員として、吐魯番盆地まで旅行いたしました。ここに残る高昌国の遺跡はカラ・ホージョなどと呼ばれていますが、この「ホージョ」は、「高昌」のヨーロッパ語読みです。私どもについてくれた通訳は大変優秀で、関西語のなまりのぬけない私などよりよっぽど立派な日本語を自由に話しました。その通訳は、カラ・ホージョ遺跡で、次のように説明してくれました。「ここは、かつてコウシヨウと呼ばれていました。『コウ』は『高い』という意味の『コウ』、『シヨウ』は、日本の歌手モリマサコの『マサ』の『昌』です」と。一緒に行きました或る大先生は、これを聞いて

て、「モリマサコつて誰だ。護君の娘か」などと言っておられました。そんなことはごさいません。

この吐魯番盆地へは、東方および東南方から「オアシス・ルート」が通じ、さらに西方へ伸びていますが、ここから西北方へ進んで天山山脈をこえ、烏魯木齊ウルムチ——新疆ウイグル自治区の首都です——に出ますと、「草原ルート」とまじわります。この「草原ルート」は、東はモンゴル高原から西へのびて、アルタイ山脈をこえ、天山山脈の北麓ぞいに西行するシルクロードの一つです。つまり、吐魯番盆地は、「オアシス・ルート」と「草原ルート」との交差する地点で、ここに多種多様な文化の花が咲き、ここが「文化のるつぽ」と言われたのはそのためでもあります。本日は、これについては省略させていただきます。

ところで、タリム盆地の南辺と北辺とを西へ走る「オアシス・ルート」は、カシュガルあたりで一緒になって、さらに西へのび、幾つかのオアシスを通して、タシケントに出ますが、ここへは、東北方から「草原ルート」が通じていて、ここで、「オアシス・ルート」と交わります。そして、ここから西へ進みますと、サマルカンド、ブハラなどに達しますが、このうち、とくにサマルカンドから、アフガニスタンやパキスタン、インドの方面へ向かうルートが出ています。こう見えますと、タシケント、サマルカンド、ブハラの地方もまた、「シルクロードの十字路」であつたわけです。

さて、アラル海へは、シル川とアム川とが大体並行してそそいでいますが、これらの間に、ザラフシャン川が東西に流れており、サマルカンドとブハラとは、このザラフシャン川の流域にあります。これらのオアシスがあるシル川とアム川との中間地域は、アラビア語で「マー・ワラー・アンナフル」と呼ばれていますが、これは「川向こうの土地」という意味です。ここにいわゆる「川」とはアム川のことです。アム川の古名はオクソス川です。シル川とアム川との中間地域は、英語で「トランスオクサニア」とか「トランスオクシアナ」とか言いますが、これは、申すまでもなく「オクソス川（アム川）の向こうの土地」を示し、「マー・ワラー・アンナフル」を英訳したものです。この地域は、また、「ソグディアナ」とも呼ばれますが、それは、ここがかつて東部イラン方言を話した——つまりイラン系の——ソグド人の土地であったからです。このソグディアナ——タシケントをもふくめて——は、前に申しましたように、「シルクロードの十字路」として、とくに東西交通の要地であったため、その住民ソグド人は、とりわけ商人として、東の方へ発展し、商業活動をさかんに行いました。中国人は、これらソグド人を「胡」「胡人」とか「商胡」「賈胡」とか呼んでいました。このソグド人については、NHKの番組でも放映されましたから、御覧になった方も多いと思いますが、彼らは、「オアシス・ルート」はもちろぬ「草原ルート」に沿って、東方へやって来まして、それらに沿った土地のあちらこちらに、その商業活動の前進基地として植民集落をつくりました。彼らは、とくに唐代に、長安——現在

の西安——や洛陽へ多数やって来まして、その結果、唐代の中国には、ソグド色の豊かなイラン文化がさかえしました。唐代に、「胡旋舞」という、イラン人、とりわけソグド人の舞妓がグルグルとバレーのようにはげしく旋回する舞いのことであると、今日のバーカキャバレーに当たる酒場にイラン人、ソグド人ホステス——「胡姬」などと呼ばれました——が侍って、銀鞍白馬にまたがった唐の貴公子を悩殺したこととか、いろいろなエピソードが、石田幹之助先生の名著『長安の春』（平凡社〔東洋文庫〕、昭和四二年）に詳しく書かれています。唐の文化の特徴は、それが国際的文化であった点にあると言われていますが、そうした文化の一端を担ったのは、現在のソ連領「シルクロードの十字路」を故郷とするソグド人であったのです。

ソグド人は、また、とくに「草原ルート」沿いに東進して来てモンゴル高原の内部へ入りこみ、そこにたてられていました突厥（五五二—七四四）やウイグル（七四四—八四〇）などといった遊牧国家の中で、経済的・政治的にだけでなく、文化的にも重要な役割を果たしました。私は、遊牧民族史上最初の文字である突厥文字は、ソグド人が用いていたソグド文字を手本にして作られたものだと思います。あれこれ考えあわせると、ソグド人は、古代日本における渡来人と同じ役割を演じたと申せましょう。このように、ソグド人が東方へ発展し、そこで、いろいろな領域で活躍したのは、先に申しました通り、彼らの故土ソグディアナが「シルクロードの十字路」

——東西交通の要衝——であったからであると言っても、けっして過言ではありません。

このソグディアナ地方の北半分はキジルクムという砂漠であり、また、アム川の西南にはカラクムと呼ばれる砂漠がひろがっています。もともと、「キジル」は「赤い」、「カラ」は「黒い」という意味のトルコ語で、また、「クム」は、トルコ語で「砂」「砂漠」をあらわします。

ところで、一口に砂漠と言いますが、それには、礫石から成る岩石砂漠と、メリケン粉のような細かい砂の原である砂砂漠とがあります。吐魯番盆地、およびその周辺は岩石砂漠でして、中国人は、これを戈壁灘ゴビタンと呼んでいます。これにたいして、タリム盆地のタクラマカン砂漠やキジルクム、カラクムは砂砂漠すなです。

普通一般に、キジルクムは「赤い砂漠」、そして、カラクムは「黒い砂漠」という意味であると説かれています。私は、飛行機の上から、キジルクムが赤くて、カラクムが黒いか、——それを確かめようと、目をこらして見ていたのですが、どう見ても、赤くもなければ黒くもない。そこで考えたのですが、「キジル」は「焼く」という動詞から派生した形容詞ですから、それは「灼熱の」という意味で、キジルクムとは「灼熱の砂漠」を示すのではあるまいか。また、「カラ」には、「黒い」のほかに「怖い」とか「恐ろしい」とか、さらには、それから転じて「廃墟になった」とかいう意味がありますから、カラクムとは「恐るべき砂漠」をあらわすのではないか、——こう思ったのですが、これは、当らずといえども遠からざる推定であると考えています。

「カラ」は、今申しましたように、本来、「黒い」を示しますが、この「カラ」は、日本語の

「クロ(黒)」と関係があるのではないかと言う言語学者がいます。また、その言語学者は、こうも言っておられます。すなわち、日本語でウグイスとかホトトギスとかいうように、鳥の名前の末尾に「ス」という音がついている。したがって、「カラス(鳥)」は、「カラ・ス」、つまり「黒い鳥」という意味ではあるまいか——と、こういうのです。私は、この説には賛成しかねますが、とにかく、こういう意見もあります。また、上に申しました通り、「カラ」は、「廢墟になつた」という意味をも持っています。先に一寸触れましたカラ・ホーシヨは、「廢墟になつた高昌」を示します。或る高名な中国学者は、カラ・ホーシヨは「新しいホーシヨ」をあらわすのだと言っておられますが、これでは、まったく逆の意味になつてしまい、この説は誤りもいところだと言わざるを得ません。

またまた話がそれましたが、本題にかえり、ブハラ、サマルカンドについて一言いたします。さて、ブハラを首都として、ソグディアナを中心し、イラン系のサーマーン朝(八七四—九九九)がたてられ、サマルカンドもその領域に入っていました。このサーマーン朝時代の遺跡は、一つ二つ残っていますが、ほとんどすべての建物は、一二一九年からはじめたチンギス・ハンなどのひきいるモンゴル軍の遠征によって破壊されてしまいました。

モンゴル軍によって大變な打撃をうけ、廢墟になつたソグディアナを復興させたのは、トルコ化したモンゴル人の子孫であるティムール(在位一三七〇—一四〇五)とその子孫たちとであり

ます。ティムールは、以前のサマルカンドの西南に新都サマルカンドをつくり、ここを首都とするティムール帝国（一三七〇—一五〇七）をたて、各地へ遠征いたしまして、一時は、今日の新疆ウイグル自治区からアナトリア（トルコ）まで、南ロシア草原から西北インドまでを征服しました。京大の間野英二さんは、「ティムールの驚異的な成功は、遊牧民の軍事力と、定住民の経済力という、二つの基礎の上にきずかれたと見ることができ。しかもティムールの時代、この二つの基盤は、北方の草原地帯と南方の定住地帯という、隔絶した二つの地域からではなく、マー・ワラー・アンナフルという一つの地域から調達できた。すなわちわれわれは、ティムールの成功の中に、中央アジアの遊牧文化とオアシス文化の類まれなる結合を見る。」と述べておられますが、この見解は正しいと思います。つまり、ティムールが、ソグディアナ（マー・ワラー・アンナフル）を中心として大帝國をたてることができたのは、ここが、北方の「草原ルート」と、南方の「オアシス・ルート」との十字路に当たっていたからであると申せます。

このように、ティムール帝國は、北と南とを結びつけたのでありますが、ただ、それだけではありません。ティムールの晩年にティムール帝國を訪れたスペインの騎士クラビホの旅行記や中国史料、イスラム史料によりますと、サマルカンドを中心として、東は中国（明）へ、西北はノヴゴロドなどをへて、おそらくはドイツの都市へ、西はヨーロッパへ、そして、南はインドへ、それぞれ通じていたシルクロードの脈動を感じとらずにはおられません。要するに、ティムール

帝国は、北と南とだけにとどまらず、東と西とを結びつけたのです。

その一例として、活字印刷術の起源の問題について考えてみましょう。

金属活字印刷が、世界で最初に実用化されたのは、朝鮮半島の高麗においてであります。ほとんどすべての書物が活字で印刷されるようになったのは、李氏朝鮮時代、十五世紀の前半のことです。ところが、これにたいして、ヨーロッパで活字印刷術を発明したのはドイツのヨハン・グーテンベルクで、それは、十五世紀の中ごろのことであると言われています。今までは一般に、朝鮮半島での活字印刷術の発明とヨーロッパでのそれとはまったく無関係であると言われてきましたが、その根拠は、朝鮮半島で活字印刷がさかんに行われた十五世紀の初頭から、それがヨーロッパで発明された十五世紀の中ごろまでの約半世紀間に、極東とヨーロッパとの間の交渉はまったく存在しなかった、という点にあります。しかし、今申しましたように、サマルカンド、ソグディアナをへて、東西を結びつけるシルクロードが通じていたとしますと、「東方の或る国で活字で印刷する技術が行われているらしい」ということが隊商などのよい話の種になり、それが、ノヴゴロドなどからドイツへ伝えられ、グーテンベルクの耳に入ったというのも、まったく考えられないことではないかと思うのですが、如何なものでしょうか。

何にせよ、ティムール帝国は、その本拠ソグディアナにおいて、北と南、そして、東と西とを結びつけたのでありますが、これは、「シルクロードの十字路」に当たるといふ、その位置を

考えれば、むしろ当然のことと申せましょう。

ティムールの孫ウルグ・ベグは、天文学者・数学者として有名で、サマルカンドの北郊の小丘の上に天文台をたて、自分で天文の観測に従事し、学者の協力をえて、天文表を編纂しました。この天文表は、ほとんど誤差をふくまず、ヨーロッパの学者たちを驚かしました。

ティムール帝国は、一五〇七年、南ロシア草原から南下して来た、同じトルコ系のウズベク民族に滅ぼされました。こうして、かつてイラン人の土地であったソグディアナは、最終的にトルコ民族の住地となりました。現在、この地方は、ウズベク社会主義共和国——首都はタシケントです——の中心となっていますが、その名前は、十六世紀の初頭に入ってから来て、この方面に住みついたトルコ民族の名前にほかなりません。

このウズベク民族は、中央アジアに三つのハン国（汗国）をたてましたが、それらのうち、主としてブハラを首都としたのがブハラ・ハン国であります。このハン国が一八六八年にロシアの属国となり、一九二四年にウズベク共和国が成立して今日に至っているわけです。

前口上はこの位にして、ほんの僅かですがスライドを御覧になっていただきたいと思えます。

一九六六年に最初に旅行したときにはチャンとした写真機を持って行ったのですが、近頃は齡をとりましてバカチョンカメラを持って行きましたら、どうもピントが甘いので、その点御了承願います。

*これは新疆ウイグル自治区の岩石砂漠です。礫石の原以外は何も見えない砂漠ですが、その中に点々と噴火口のように見えるのはカーレーズという独特の灌漑施設の口です。これは縦穴を何本も掘りましてそれらの底と底とを通じて水を暗渠式に通す施設で、中国人は坎児井、孔のある井戸と言っておりますが、彼等は意味と音をうまく組合せることが上手です。中世ペルシャ語の音訳です。十八世紀頃にイランから入ったものではないかと言われております。トルファン、クチャ地方にある独特の灌漑法で、砂漠の真中に人工的な灌漑施設によってオアシスを作ろうとする訳です。

*西に行きましてカラクム砂漠の入口です。駱駝は全部ヒトコブラクダで、こうやって隊商に出るのだろうかと思えます。

*カラクム砂漠を運河によってアム河からカスピ海まで繋ぐ世界最大の運河が建設中であります。運河の途中を塞ぎ止めて湖水を作り、そこで水泳しております。ここは先程申しました非常に細かい砂です。

*東の方へ参りまして遊牧民族のカザフ族の女性が馬に乗っている所です。

*カザフのパオ。移動式の住居で夏と冬を移動して回ります。屋根は葦か何かで葺いてあり、その上にフェルトを被せる。天井はいろんな形がありますが、それに開けられた穴は煙出しと採光を兼ねています。雨が降ると困りますが減多に降らないのでこれで充分です。

*カラクム砂漠の入口で、観光客を乗せるためヒトコブラクダが待っている。私が見つけていますが、こんな物に乗ってポコポコ行っても決してロマンチックなものではありません。十分間も乗っているとヘッドが出そうになります。「月の砂漠」の歌は非常にロマンチックですが、現実にはそんなものではありません。

*パミール高原から流れ出る雪解け水が盛んに砂漠や草原を潤す。逆巻いて滔々たる流れですが、何時の間にか砂の中に没して伏流になります。河の周辺にオアシスが出来る。伏流が砂漠の真中に自然の湧水となってオアシスになる。それからこれはトルファン地区ですが、用水路を作ってオアシスを作る緑化運動も盛んになっております。

*カラクム運河です。アムダリヤとカスピ海を繋ぐ大運河です。

*カーレーズの出口です。NHKの番組ではこの中に潜った模様を放映しておりました。この水を地面に出して地表を流し、少し暖めてから農耕地に注ぎます。水を求めての砂漠の中の生活は、一つはいろんな手段で水を得るための戦いの連続で、水の利用法についても独特の知恵があります。

*ブハラ貯水池です。革命以前には灌漑の他に飲み水としても使われていた。社会主義政権になってから、伝染病の蔓延を防ぐために飲み水としては使わなくなったということです。こういう貯水池もオアシスを成立させる条件の一つです。日曜日には市民がこのまわりでシシケバブな

どを食べて楽しんでます。

*水を求めての戦いの他に、特にトルファン地方では物凄い風が吹くので、こういう防風林が重要でありまして、トルファン地区には「風が吹いて砂が進むと人間が退き、人間が進むと砂が退く」という諺があるそうです。

*砂と風に対してオアシスを守る人間の努力も重要でありました。オアシスが出来る、そこを中心に次第に都市が発展してくる。これはプハラの現在のオアシスです。トルコ民族は今椅子も使いますが、昔は胡座をかいていました。そしてシシケバブ、これは焼鳥の大きなやつと思えばよいのですが、を食べている。それからお茶、緑茶、それも中国よりも日本の茶に近いものです。我々は一行二十七人、全員暑さに参って腹下しに罹った時に一番役に立ったのはお茶でありました。

*サマルカンドのピオネールです。

*当時は毛沢東の権威が健在で、毛の命令によって用水路も河も何も無い所に用水路を引いて作ったオアシスだと自慢しておりました。

*これはトルファンですが、ここまでがオアシスで、ここから砂漠になる。向こうにまたオアシスがあるというふうに、同じ砂漠の中にオアシスが点々と存在します。オアシスとオアシスとを結ぶ近距離貿易の道だったのが次第に遠距離貿易の道になって、それから遂にシルクロードが成

立したのであろうと考えられます。

*オアシスでは農業と手工業、さらに商業が重要な役割を果たすようになる。宿場町的な性格を持ち、バザールは遊牧民と農耕民との交易の場ともなります。

*カラクム砂漠の中のトルクメン社会主義共和国の首都のアシハバードのバザールです。

*オアシスの真中に立派な高層建築が立並んでいます。これはサマルカンドであります。表向きは立派ですが、中は大変で、先ず冷房装置もあるにはあるが動かさない。突然動きだすと物凄い音を立てて眠れない。途端に消えて暑くなる。この辺りでは風呂に水をためるストッパーがないのが普通です。洗面器にもストッパーがない。私はゴルフの球を持って行って代用にしました。中にはビニールの袋に水を入れてストッパーの代りにした人もいます。サービスも悪いし、皆さんお役人ですからこちらから頭を下げなければならぬ。しかし表向きは実に立派な物です。一九六六年に最初に行ったときに比べると今昔の感に堪えぬ立派な建物が次々と並んでおります。

*一九六六年四月二十六日の夜、タシケントに着いたのは丁度地震のあった夜でして、ホテルも半分壊れた状態でしたが寝るには差支えなかった。その時の記念像が今度行ったら立っていません。これは地震の夕方の写真です。それと比べると随分変わっていることが判って頂けると思いますが。ここでは炊出しをやっていました。

*水を求める生活ですから、水が極めて重要であります。私は中央アジアの弘法大師伝説に喩え

るのですが、チェシメアユブというのがあります。チェシメとはトルコ語で泉、アユブとは予言者のヨブで、彼がここで民衆から水がなくて困っていると訴えられ、杖を地面に突き立てたら水が湧き出たと言うのであります。ヨブの泉という訳です。立てられたのはティムール帝国の時代のようにありますが、泉は昔からあって、この辺りは聖なる土地とされ、一九六六年に参りました時にはお墓がズツと並んでいましたが、今はそれは無くなっております。砂漠の中で水の重要性を象徴する一つの物語であると考えております。

* サマルカンドでウルグ・ベグが建てたイスラム学院で、表は全部綺麗に修復し尽されています。これはその正面です。

* これはその向かいのシールドールというイスラムの学院で内部がこうなっていて、上の方に生徒がいて勉強する寄宿舎になっています。現在は使われておらず、夜にはコンサートが開かれたりしています。シールドール、ペルシャ語でライオンの意味で、おそらく日本語、中国語の獅子はシールドールから来たのではないかと藤田豊八先生の説があります。しかしこれは獅子というよりも虎ですね。太陽を象った人間と虎でありまして、ここに羊か山羊がありますが、こういうイスラムの公共的建物に人間、偶像を描くことは極めて稀なことです。その人に聞いて見ますと、コーランにそういう物を描いてはならないと書いてないと言う。確かに書いてはないが、原則としては偶像に類する物をイスラムの公共建物に描いたり、造ったりしないということにな

っておりますが、田舎に参りますと、そういうものに出会います。私共のようにトルコのイスラムなんかをやっていますとイスラムの専門家は護さんの研究しているのは田舎イスラムだといいますが、田舎イスラムをやらないと本当のイスラムは判らないのではないかと考えております。これもその例の一つであります。

*これはカラクムの西の方、イランとの国境のアナウの遺跡です。アナウは原始農耕発生の土地として有名ですが、これは、十八世紀の地表であります。ここにイスラムの寺院が建てられておりました。そこに龍の絵が描かれてあったと言われています。龍が何故イスラムの礼拝堂に描かれてあったかが問題になり、ソ連の学者の間でいろいろな説があるようですが、私は龍は水の象徴だからカラクム砂漠の真中でも非常に重要視され、水の権化として描かれたのではないかと言いましたら、そういうことは気が付かなかったと言っておりましたが、これは私の思い付きで、当たっているかどうかはよく判りません。

*サマルカンドのシールドールとウルグ・ベグの学院の間に今一つイスラムの学院があります。金箔で塗られたイスラム学院と名前がついており、前回行った時は見る影もない物でしたが、このように見事に再生され、観光資源としてキンキンピカピカの、まさに金箔に塗られたイスラム高等学院でありました。これは正面です。あちらは石や煉瓦造りですから、壊れてもそのまま残した方がとも思うのですが、とに角綺麗に修復してありました。

*これはティムール一族のお墓です。ここはあまり修築してない。昔のままのイスラム一族のお墓が守られております。シャーヒージンダー、「生きている王様」という場所です。マホメットの従兄弟がここまで来てイスラムの教えを説いていた所、異教徒に囲まれ自ら首を切つて井戸に沈んだ。ところが今なお、彼が生きているという伝説がありまして、そのために「生きている王様」と呼ばれています。マホメットの従兄弟がここに来た事實はございません。おそらくイスラム以前から神聖な土地であつて、そこにこういう伝説が結びつき、ティムールの一族のお墓が出来たのではないか。井上靖さんはこれを「真球の小箱」と呼んでおられますが、修復しないままの綺麗なものが坂に沿つてズツと並んでいます。これもその一つです。

*ウルグ・ベグの天文台に参ります。矢絰はウズベク社会主義共和国、その西のトルクメンなどの特徴的な模様であります。これは天文台の一部で、象限儀というんでしょうか、よく判りませんが天体の高さを測る機械だと聞いております。はじめは何処にあるのか判らなかつたのですが、ソ連のヴィヤトキンが文献の上から推定して一九〇八年に掘つたら実際に出て来たのであります。ヴィヤトキンの墓もここにあります。

*ウルグ・ベグの博物館が傍らにあります。

*発掘の状況です。

*ビービーハヌムの大寺院です。

*以前にはこのようにまさに「廃墟の美」を示していました。目下修築中です。今ではビービーハヌムの寺院ということになっていますが、実際はティムールが建てた中央アジア最大のイスラム寺院でした。これには伝説がありまして、ティムールがインドに遠征している間にビービーハヌム——ハヌムは婦人という意味で皇后をも指します——という美人の皇后がティムールのために、彼がインド遠征から帰るまでに建てたいと思った。ところが建築士が彼女に秘かな恋心を抱きまして、これが完成すれば彼女に別れて故郷へ帰らなければならない。それでワザと建築を遅らせていたと言います。それでビービーハヌムはティムールが帰るまでには是非とも完成して欲しいと言ったところ建築士は己が恋心を打明けた。彼女は幾つかの卵にいろんな色を塗って彼の前に出し、表面はいろいろ違うけれども中味は、女性の中味は皆一緒だと論じた。建築士もさる者で、ウオトカと水とを指して見たところは同じでも中味は違うと言ったのです。そこで、ビービーハヌムは建築士に枕の上からキスすることを許した。しかしキスマークが残った。ティムールは怒って建築士を処刑しようとしたが、彼に翼が生えて建物高く飛び去ったという伝説であります。

一九六六年には枕の上からキスすることを許したと聞きましたが、二度目には枕ではおかしいとハンカチに変わり、次には何もなしになってキスマークも残り易くなったというわけです。また、今度行った時は翼が生えたとは言いませんで、彼は非常な技術者で翼を作る技術に長けていたと

説明してくれました。三回訪ねて行く間に段々伝説が合理化されて行ったのではないかと考えられます。

*これはコーラン台です。本当は中であつたのを外へ持出してあります。以前の写真の方が宜しい。

*ティムールのお墓です。その内部です。イリ河の流域の緑色の石で造ってあります。実はイスラムの墓は上にこういう象徴を置きまして、下に本当に遺骸が葬られるお棺がある訳で、これは単なるシンボルです。この階下に本当のお墓があります。

*掘った時の状況です。ティムールが実際右足、右手が不自由であつたことが判つた。ティムール・イ・ランク、「足の不自由なティムール」が訛つてタメルラン、タメルレインとかタンバレンとか言うようになりました。

発掘した年に独ソ戦争が勃発しましたが、土地の古老達は世界を血で征服したティムールの墓を暴いたからこんな大戦争が起つたと言つたそうです。

*これはサマルカンドの河を東へ行った所のペンジケントの遺跡でして、ここに小さなオアシス国家がありました。イスラム軍が八世紀の前半に攻めて廃墟にした。この王様はある山に逃げこんで、そこもまた攻められて廃墟になる訳ですが、そのムグ山はNHKのTVでも出ました。
*これがザラフシャン河で、アム河とシル河の間を東から西に流れています。このサマルカンド

の上流にある遺跡がペンジケント、五つの町という名ですが、それを上から見た写真です。

*今までの写真は全部ティムール帝国時代の遺跡を示したもので、それらは全部色彩タイルで蔽われております。ところがブハラにありますこのイスマール・サマーニ廟には色タイルは全く使われていません。これはモンゴル軍の遠征を免れた殆ど唯一の遺物でありまして、九九九年に滅亡したサーマン朝の王様のお墓であります。何故ここがチンギス・ハンの軍隊の掠奪を免れたかをいろんな人に聞いたのですが、ブハラの学者の言う所では、この辺り一帯が先程お話ししたヨブの泉のすぐ側の聖地にしてズーツとお墓が並んでいて、聖地でございますから彼等もここを避けたという説明でございました。

ここでは色タイルは使われておりませんが、月明の夜に見ると非常に綺麗だそうです。建物の凹凸による影が月の動きに従って変り、その動きによって模様を表す技巧を使っています。

*ブハラ・ハン国の時代にはカリアンの塔と言ひまして、処刑人を袋に入れてこの上から突き落して死刑にした死の塔です。

*ブハラのイスラム学院では現在も二十五人の若い青年達がイスラム学を勉強しており、ここは中学課程ですが、高等学校課程はタシケントに行つて勉強して各地のイスラム学院に行く訳です。

ソ連では反宗教、無宗教博物館がネフスキー通りにあつて、宗教が如何に残酷無残ものであるかを宣伝しておりますが、中央アジアではそうは参りませんので、ここでイスラムのイマーム、

導師と申しますか、一般民衆にイスラムを教える、あるいはイスラムの寺院に勤める人を養成しております。

*ブハラはイスラム学院の一つで、ここにも太陽と人間と鳥が描かれております。イスラムの本拠でなく、周辺の地域ではイスラムも変って来るのではないかと考えております。私はイスラム世界における統一と多様性などと申しますけれども、イスラム世界は一つの統一を保っていると同時にいろんな違ったものが出て来るのではないかと思う訳であります。これは近くで撮った所です。顔はシールドルのそれと全く同じです。

*ブハラ・ハン国のハンの城砦です。外郭は非常に堅固な城壁で囲まれております。内部の即位式をした所です。

*トルコにナスレッティン・ホジャという有名な、一休禪師、あるいはキツチョムさんか曾呂利新左衛門のような人が今でも伝えられておりまして、民衆の立場からタイムールをひやかしたことで有名です。私は平凡社の東洋文庫で『ナスレッティン・ホジャ物語』を翻訳しましたが、発音が面倒でナンジャモンジャ物語という友人もいます。この像がブハラの公園にあります。何故ブハラにあるのかよく判らなかつたのですが、トルコ民族の民衆を代表してタイムールをやつた人のシンボルとして、ここに銅像をたててあるのだと言っております。

*タシケントには中央アジア、シベリアのイスラム教の本部があります。

* サマルカンドのバザールの入口で、コルホーズのバザールとウズベク語で書いてあります。

* アナウの遺跡から発見されたヴィーナス像で、ヘレニズム文化がズツと及んで来た一つの証拠です。

* タシケントにいた日本語の出来る唯一の通訳で、朝鮮半島出身の人です。タシケントには朝鮮半島の人非常に沢山います。戦争の時代にスターリンが強制移住させたためで、タシケントに朝鮮半島の人々のコルホーズがあります。この通訳が何を言っているのかサツパリ判らない。こちらの英語の方がよく判る。

* 絨緞作りです。絹織物と同時に絨緞作りも有名です。ノルマ制があつて一所懸命に働いています。

* トルクメン共和国アシハバードの特徴的な模様ですが、オアシスとシルクロードとを代表しているそうです。

* 赤ちゃんの摇篮で、小便用の穴があります。

* 「親愛なる我々のお客様よ、よくいらっしゃいました」とロシア語、ウズベク語、英語、そして最後にアラビア語で書いてある。これだけやらないとイスラムのトルコ民族を懐柔するのは困難であるという一つの象徴的な例だと思えます。

* アムール河です。ハバロフスクにある日本人墓地です。

*タシケントの民族衣裳の音楽団、縦の葦笛で胡笛と言われるものです。

*これがグルグル廻るので胡旋舞に当る舞ではないかと思われます。胡旋舞の原点が残っているのかどうかはハッキリしませんが、バレエのようにグルグルグル廻る。美人揃いで写真も随分撮ったのですが……。

纏らない話でございましたが、大体砂漠とオアシス、オアシスから成立して来る町、ソ連領におけるイスラムというふうなものについて多少お話ししました。時間も超過しましたので、これで止めさせていただきます。誠に下手の長談議で……御清聴ありがとうございました。

(東京大学名誉教授)